

インターネットの利用による中国教育の実践報告： 中国国際放送局と結ぶ双方向中国語会話学習 [研究ノート]

著者	立石 昌広, ? 徳花
雑誌名	長野県短期大学紀要
巻	67
ページ	53-57
発行年	2013-02
URL	http://id.nii.ac.jp/1118/00000167/

インターネットの利用による中国語教育の実践報告 —中国国際放送局と結ぶ双方向中国語会話学習—

A Report on the Practical Education by Internet in Chinese Class

立石 昌広、鄧 徳花*³

Tateishi MASAHIRO, Deng DEHUA

はじめに

本稿はインターネットのテレビ会話機能を利用して中国国際放送局¹と長野県短期大学中国語授業クラスを直接リアルタイムで結んで行われた双方向中国語会話授業の報告である。この実践例を題材として中国語学習の改善、学生の中国理解を深め、学習意欲・興味を引き出すなどの方法・手段としてインターネットをいかに役立てるか、その効果や改善点などを研究しようとする。

中国のプレゼンスは近年ますます大きくなり、中国語学習の必要性も高まり、中国語授業を選択する学生は増加した。インターネットを通して簡単に身近に中国の人々の生活に触れる機会も多くなっている。

この試みは何回かの試行錯誤を経て中国語授業の30分間を使い、直接中国現地と結び中国語会話授業を行うものであった。中国のネイティブの発音をきくことができるということやリアルタイムで見たたり聞いたり質問などもできるという中国語学習者にとって魅力ある授業となった。双方向のやり取りもあり、学習者側のモチベーションを上げることや、高いレベルの中国語指導が受けられるので教育の質を高めるなどの効果も期待された。本学では一クラス百人を超える中国語授業が行われ、中国語担当教員は日本人教員一名のみであった。インターネットを利用して本学の中国語教育を改善する方途を探ることも目的のひとつであった。

インターネットを利用する中国語教育に関しては

「長野大学の中国語CALL (Computer Assisted language learning) 教材システム」²の試みがある。これは専用のサーバーに中国語の教材を置いておき、学生がネットからアクセスして利用するものである。長野大学の場合、サーバーに置かれた教材は発音の基礎であるピンインから日常会話の学習までステップバイステップの形式で提示されているという。したがって時間と空間の制限を受けずに学習できる。

本学ではこうした設備もノウハウの蓄積もないので最も簡単なやりかた、すなわち中国北京放送局に直にアクセスして授業の一部とする。ただし双方向のコミュニケーションが成立し、語学教育として有利な面が多々あることは勿論である。

今日ではインターネットで少しばかりウェブサイトを検索すれば沢山の大学や中国語教育にたずさわる人たちが中国語教育教材をフリーで提供しているのに気がつく。ネット利用の中国語教育の時期はすでに熟している。オンラインで中国語講座を受講できる有料のサービスもあり、そこではスカイプを使い、双方向の会話レッスンを行っている。この点では今回の本学の試みと同じ方法である。

以下、何回かの試行錯誤の準備段階と実験、学生へのアンケート調査、そして実際の授業場面、その結果と成果、の順で報告する。学生からのリアクションペーパーによる反応も最後に紹介する。

I 受講する側の情報環境

情報環境、とりわけスマートフォンの利用可能性などについてアンケートを実施した。学生のほとんどはネット環境に馴染んでいることや半数の学生がスマートフォン携帯を使用している実態が分かった。今回の実践には相当の理解があり、ネットを使った授業にも違和感はないと思われた。

アンケートは受講学生151名中、143名が回答し

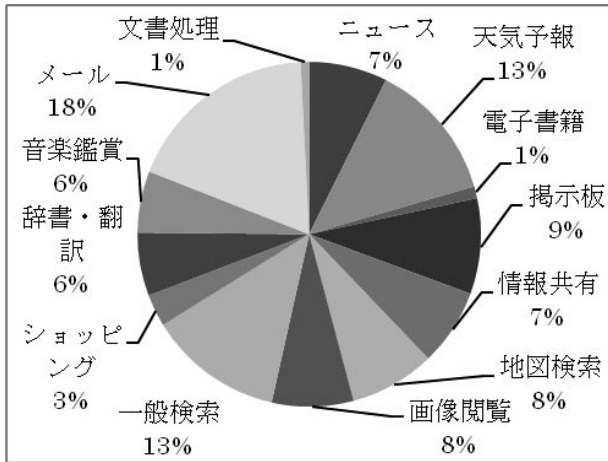
1 中国国際放送局は中国唯一の国家国際放送局 (CRI) である。前身は、1945年9月5日に第一声を発した「中国人民の声」。1949年10月1日、天安門上より「中華人民共和国成立」の宣言を実況中継し、「中央人民広播電台」として新たなスタートを切る。1950年には、本腰を入れて海外放送をはじめ、「北京放送」の名前で親しまれてきた。現在、61の言語と中国の共通語 (普通話) と4つの方言を用いて200あまりの国々に向け放送を行い、一日の放送時間は延べ3200時間を超えている。尚、今年4月、本学と中国国際放送局との間で教育交流などのための覚書が取り交わされ、放送局側から客員研究員が本学に派遣され、本学の教職員・学生に中国での研修の機会も与えられることになった。

2 ビラルル・イリヤス (2008年) 「時代に合った語学教育システムの開発および導入の必要性について」『長野大学紀要』第30巻1号 47-57頁

た³。スマートフォン所持者は長野県短期大学で60%、両方所持している学生が1%⁴。スマートフォン購入理由では32%がみんなが持っているからという理由で購入している。使う時間と場所では授業中が2%である⁵。なお中国語授業中に携帯などを使い録音や録画、辞書検索などを認めている。

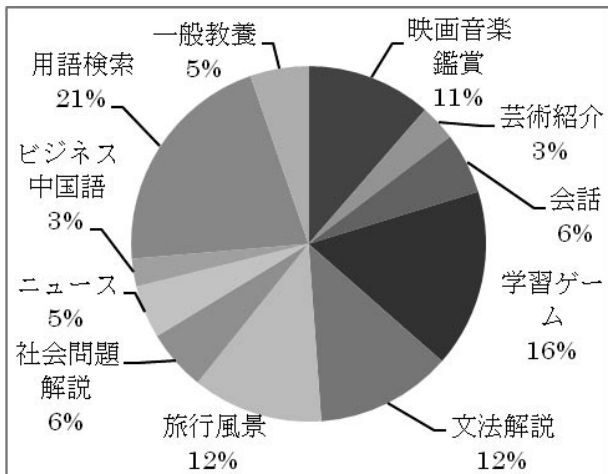
スマートフォンを含む携帯電話の利用コンテンツでは以下のようなものである。

グラフ1 学生が現在利用しているコンテンツ



次にグラフ2に見るように漢語学習のために欲しいコンテンツという項目では、用語検索で21%と高率で、次が学習ゲーム16%だった⁶。辞書代わりに使うことがかなり普及している様子が見える。

グラフ2 学生が要望するコンテンツ



3 長野県短期大学のこの授業では男子は少なく4名のみである。比較のために長野高専（授業では理工系の男子学生がほとんどで女子は5名）中国語クラスでも同じアンケートを実施した。47名中45名が回答した。

4 長野高専では38%が所持し、4%が両方所持している

5 長野高専では14%という高率だった。

た学習ゲームに要求が多いことなどをみると勉学に活用が広がるスマートフォン普及の影響があると思われる。

スマートフォンの利点についての認識はコンテンツが豊富としたものが半数近くをしめ44%だった。

多くの学生は最新の携帯電話を持っており、使い方にも習熟している。若い世代にとってネット利用は違和感がなく、ネットを通して中国社会や文化に触れることができる環境にある。今回の試みでは教員だけがスマートフォンを使いアクセスしたが、学生が個別にスマートフォンを利用して北京放送局にアクセスすることも可能と思われる。さらにゲーム感覚でアクセスして知識を得られるならば学生のニーズに答えることになるだろう。

II 準備過程と実際の実践会話授業の場面

1) 準備段階

河北大学留学中の本学学生との交信テストを何度か行った。本学から河北大学へ派遣されている学生が北京の前門スターバックス、河北大学の留学生寮、中国青島（チンタオ）のホテルからスカイプでテレビ電話機能を使い、本学中国語受講生とそれぞれの場所で5分程度のテレビ会話を行った。次に北京放送局のスタジオと結ぶ実験ではスカイプよりも中国では一般的なQQというソフトを使った。費用面および習熟度などの条件を鑑み、確実な方法と考えられた。機能はスカイプとほぼ同じである。QQによる交信では中国国際放送局のスタッフにスマートフォンを使ってもらいスタジオ内、およびラジオ局のビルの外まで出ていただき、周囲の景色も撮影しながら会話を行った。

受講学生には新鮮な驚きとなった。しかし、学生個人が所持する携帯で多数の学生が同時にアクセスする実験は行われなかった。

2) 実施場面

中国語授業一年生で学習を始めたばかりの学生が対象。北京放送局側は中国語講座担当者と日本語アナウンサーの二人。7月30日月曜日、11時から30分間の授業。写真は当日の中国語授業風景。スクリーンに映し出されたアナウンサーと学生代表との会話を多数の学生が視聴。

6 長野高専では映画音楽鑑賞16%、芸術14% ニュース14%となった。

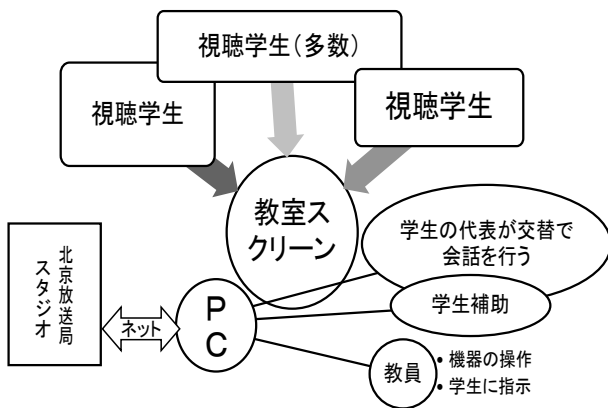
画像1 授業風景



(出所：中国国際放送局のホームページから。2012年8月)

本番の授業は30分間中国語で数字の発音指導を中心に行われた。図解すれば以下の図1のようになる。授業は北京の街中の事情にも触れながら、マクドナルド商品の実物を見せて値段を聞いたり、マクドナルドの電話番号の話題などが提供された。クイズも出してもらい、例えば、北京放送局の電話番号、「010（北京の市外局番）68892180」を教室の学生にも聞き取ってもらう内容なども加えられた。

図解1 実際に行われた授業の構図



機器や設備の制限から学生は選ばれた一人の学生がマイクをもち中国現地と会話できる。この部分のみ双方向である。これを多数の学生がスクリーンに映った中国側のアナウンサーを見ることができる。また大勢の学生に対して北京放送局のアナウンサーが問題を出し、質問に答える形式の授業内容も取り入れた。これは教室内でマイクを回すなどして回答学生に発言させるか、前方に置かれたノートパソコン1台に向かって代表者などが答える。

150人の受講生に対して興味ある授業が行われたが、多数の学生が自由にアクセスできるような環境は構築できなかった。今後の課題となった。

Ⅲ その後の経過、および課題

最後の授業でリアクションペーパーを配布し、学生から以下のような感想を得た。「リアルタイムで中国と直接つながるといふ感覚がとても面白く、中国への関心がたかまりました」、「中国の人達と顔を見ながら話せるという体験は非常に印象的で、中国に興味を持つようになった」、「中国と通信して行く講義は画期的で面白かった」「本場の発音に触れることができ、良かった」、「新鮮で楽しかった、とても意欲的になった」などである。中国へ行ったことのない学生にとっては、インターネットを通じて、現地の中国人と直接話すことができ、学習意欲の喚起にプラスになったようだ。143枚回収したアンケート中、63人のリアクションペーパーで以上のような書き込みがあった。回答した多くの学生が今回のリアルタイムでの北京放送局との双方向の会話授業を高く評価し、今後も中国語の授業でこの試みを継続するよう望んでいることがわかる。

今年、夏休みを利用して個人旅行で北京へ行き、中国国際放送局を訪問した学生2名がいた。その時の写真が以下。



画像2 国際放送局日本語部スタッフと撮影

(左は国際放送局日本語部副主任の李さん、右側2人は放送局を訪問した本学の学生)

身近に中国を体験できるネット利用の交流は政府や国家といった枠を越えて人と人、地域と地域の交流が直接行える時代に入っていることを実感させる。なお残された課題は多くあるが、こうした実践的

取り組みを続け、ひとつずつ問題を明らかにし、解決策を検討していくことになる。

ネット利用の学習システムは「マルチ双方向授業」とも言われ、PINE-NET II⁷など遠隔教育システムとして実際に運用されている。自由な時間に受講できるオンデマンド機能もあり、e-ラーニング利用で個別学生が自宅でも学習できる。さらに通信衛星を使って、全国の大学を結んで授業が受けられるシステムとして文部科学省が推進してきたSCSというシステムも90年代にすでに運用されている⁸。

今回の本学での試みはインターネットを介して国境をこえて多数の学生を対象にするという点で斬新な方法である。実際のネット社会では中国と日本の学生が中国語学習をテレビ電話を介して行っており、営業運営している会社もすでに存在する。技術環境は十分成熟しつつある。

中国国際放送局でも、イタリアとパキスタンとの間で「太極拳」や「龍をテーマとする文化」をテーマにネットテレビ会議を行う形式で中国語学習を行っている。中国国際放送局を中国語教育（授業）の発信者とし、海外の複数の受講者との双方向会話授業は個人が所持するPCやスマートフォン、あるいはタブレット端末のような通信手段で簡単に国境を越えて自由に行える時代となった。

今後、本学との間で中国語授業を双方向に自由に全員参加で行うためにはいくつかのハードルを越えなければならない。QQやスカイプなどの通信手段を用いて小規模なテレビ会話のような試みは実際に行われているし、本学でも可能であろう。但し大勢の人が通信に入るためにはスマホ或いはタブレット端末などの機器を多数の学生が所持しなければならないというハード面の条件を整えること、同じ会話空間に多数の人が入っていけるような共有ソフトとシステムの開発が必要となる。また、学習意欲をそこなわないために操作方法が簡便であることも必要であろう。

中国国際放送局のアナウンサーにスタジオの外、北京市の街中や中国の各地方から日本の学習者個人

にリアルタイムで双方向通信できるような企画も将来は実現したいものである。

おわりに

今回の試みは北京放送局の中国語講座担当者と日本人アナウンサー、そして放送局スタッフらの協力によって実現した。以下、北京放送局について若干の説明を加える。

中国国際放送局⁹通称北京放送局は1960年代から中国語講座を開設し、専門の教員によるネット上での中国語講座も運営されている。近年ラジオ放送以外にも、マルチメディアの発展に力を入れ、1998年にウェブサイトとしてCRI Online サイトが開設され、61の言語を網羅し、世界で最も多くの言語を網羅したマルチメディアネットワークのプラットフォームとなった。2006年ホームページCRIオンラインは自ら開発した多言語ポッドキャストのプラットフォームを立ち上げた。アップロードされる数々のコンテンツの中でも、オリジナルの放送コンテンツが最も多く、外国語学習、トークショー、ラジオ番組などもある。2007年、チャイナユニコム、チャイナモバイルと協力して、CRI携帯電話テレビ業務を展開。サービス内容には音声動画番組の生放送、リクエスト、ダウンロードが含まれている。2007年9月にはウェブサイトCRIオンラインの「ワールドネットラジオ (CRI WebCast)」が正式にオープンした。2008年8月、モバイル・オンラインの英語版と中国語版のテスト運営がスタートした。これは、CRIがニューメディアであるモバイルCRIオンライン分野へと発展するための重要な一歩となった。2009年7月 中国国際放送局『モバイルCRIオンライン』が北京でスタート。2010年3月23日 中国初の中国映画文化を紹介する外国語サイト『華映オンライン』が香港のHKエキシビションセンターで正式にスタートした。このサイトは中国と外国の文化交流を促し、海外のユーザーがインターネットを通じて中国映画と中国文化に対する理解を深めることを目的としている。日本語放送は2012年現在、日本人スタッフを含め36名のスタッフがおり、ニュースの他、《時事解説》、《中国語講座》、《ビジネス中国語》《経済直行便》など。それ以外にも、《古典エナジー》などのネット音声番組や、《真的吗？ in 北京》というネット映像番組も放

7 電子開発学園のHPを参照

<http://www.edc.ac.jp/contents/enkaku.html> (2012年10月1日入手)

8 SCS「スペースコラボレーションシステム」(Space Collaboration System)とは独立行政法人・メディア教育開発センターが管理する、大学・研究機関の間でデジタル衛星通信による映像交換を中心とした大学間ネットワークシステムのこと。映像・音声による双方向通信を可能にする。メディア教育開発センターは2009年3月31日に廃止され、その後の業務は放送大学ICT活用・遠隔教育センターに移管された

9 中国国際放送局のホームページ <http://japanese.cri.cn/> 参照。

送。日本にも、東京支局を常設し、2007年12月には中国初のラジオ孔子学堂を長野県日中友好協会と共同で開設した。今回、長野県短期大学との間で行われたネットを介した授業の試みはCRIでも高い評価を得、今後の発展が注目されている。

(長野県短期大学 多文化コミュニケーション学科
国際地域文化専攻 立石 昌広、
長野県短期大学客員研究員
中国国際放送局日本語部 鄧 徳花)
(連絡先 〒380-8525 長野県長野市三輪8-49-7
TEL 026-234-1221 FAX 026-235-0026)
(平成24年10月1日受付、平成24年11月28日受理)